

## 古典落語の特殊語彙（3）

Concerning The Particular Words of "Classic RAKUGO" (3)

\* 加藤岳人  
Takehito KATO

## 序

ここ数年の間に落語をめぐる状況は大きく変わってきた。テレビドラマや映画に触発されてのことであろうと想像できるが、DVDやCDがセットになつた落語雑誌が刊行され、手軽に入手できるようになつた。おもしろいことに、どのような享受者をターゲットとするかによって演者や解説、その深さが異なつてゐるようだが、ともかくも、手軽に口演に触れ、解説を楽しむことができるのはありがたい。

それに比べて従来の落語CDは、よほど好きな人が狙いを定めて注文するものであつたように思う。『小さん落語全集』などと称して書籍とのセット販売をするものはその典型だし、CDだけのものでもセット販売は珍しくない。そうなると自動的に最低四枚、多ければ十枚二十枚を一括購入することになり、とても手軽と呼べるものではなくなる。もつとも、音楽CDを考えれば一枚に十曲前後が入つてゐるだろうから、落語CDの四、五枚セットはいわば「アルバム」の役目を果たしていると言えそうだ。十枚二十枚といつても、音楽CDの複数枚アルバムがある以上、それに見合う落語CDセットがあつておかしくないわけである。

そうしたセット購入の魅力は、なんといつても意外性につきのではないだろうか。それまで特に好きではなかつた漸がある時を境に突然輝きだしたり、「なぜこんなに既知の漸と考えていたものが新しい命を吹き込まれていたり、「なぜこんなにいい漸に気づかなかつたか」と慚愧に堪えぬことおびただしい。

CD付き雑誌の購読は、そうしたセット販売の長所も兼ね備えている。毎回、演者も演目も異なる一枚が届き、好みによらない漸を聴くことができるわけだ。価格も概して安いし、視覚的資料もあつて、落語を聴く楽しみが飛躍的に増し

たと言つていい。

そのようなものが普及してきているのだから、落語の語彙解説などあらためてする必要はないかもしないが、世の流行がはかないものだということもまた周知の事実である。雑誌の刊行も終了したようだ。「拾遺」という程度の「」であつても、「」になにがしかのものは遺しておきたいと考える次第である。

## 一

「おう、ときには若衆、おらあ、おめえんといへ、酒がいい、食いものがうめえってんでへえつてきたんじやあねえよ。おらあ、はじめての客だが、ただ、おめえの声に惚れこんでへえつてきたんだ……『ええ、おひとりさん、のこで一升……』……あの声が、おらあ気にいつた。なにか下地があるな、おめえの声にやあ長唄がへえつてる」（傍点ママ）

（講談社文庫『古典落語（続々）』）

「ずつこけ」の序段、あとひき上戸の男が繰り出すたわごとである。一升という量も量だが、昔の酒というものの、アルコール度数はそう高くなかったらしく、五合、一升という大きな升や盃がよく登場する。ところで、「のこ」とはいい漸に気づかなかつたか」と慚愧に堪えぬことおびただしい。

「かずのこ」の上の部分を略した居酒屋での通言」（『日本国語大辞典』）

\* 釧路高専一般教科（国語）准教授

種を明かしてしまえば単純きわまりない。干し数の子という形で保存が利くし、輸送にも都合のいい、便利な肴だつたであろう。

このような、省略による俗言・通言の派生はなにも古い時代の専売特許ではない。今も変わらず、あるいは現代の方がさかんに生まれている可能性もある。様々なものが生まれ、その中の一握りが生き残る、という過程を経て言葉が固定していくのだから、どの時代を見ても「現在時」の俗言は大量にあるはずだ。ただ、古い表現の方が響きや語呂はいいように思われる。しゃれがきいているという点でみれば、今の省略語・俗言は古いものに及ぶべくもない。

「しつかりしろやい。いいか、一両二分と八百借りがあるんだ。そこへ一両二分持っていくんだい。八百くれえおんの字だ」

「なんだ？ おんの字てえなあ」

「あたぼうてんだ」

「なんだい？ あたぼうてえなあ」

「いちいち聞くまい。あたりめえだ、べらぼうめてんだよ。江戸っ子でえ。あたりめえだ、べらぼうめなんかいつてりやあ、日のみじけえ時分にやあ日が暮れちまうぜ。だから、つめてあたぼうでえ」（傍点ママ）

（大工調べ）講談社文庫『古典落語（続）』

「なんだい？」と聞き返しているのは与太郎であり、べらんめえ口調でしゃべっているのは棟梁である。この後、与太郎は大家のところで家賃を払うついでにあたぼうを披露し、大いに怒りを買うことになるのだが、あたぼうが当たり前の意であることはいいとして、「ぼう」とは何かというと、実はよくわかつていよいよ。『大工調べ』に語源が説明されているのだからそれでよさそうなのだが、落語にあらわれる語源説は一般に信頼されていない。

『日本国語大辞典』では、『ぼう』は人を親しみまたは嘲つていう「坊」の意かとあり、文政期の隨筆に「あた坊」という言葉が流行しているとの記述があることに触れている。人を親しみまたは嘲つていう「坊」とは、けん坊、朝寝坊などの坊である。しかし、この「坊」は、その上に人の性質や性癖を示す言葉が乗つていなければ意味をなさない。「当たり前やつ」と表現するこにはいさか問題があるから、そう簡単にうなづくわけにはいかないので。

なお、「あたりめえだ、べらぼうめ」の「べらぼう」の方には「便乱坊」と「籠棒」の漢字があてられるが、一般的の携行版国語辞典では「籠棒」のみをてている。「籠棒」は続飯（飯粒を練つて作った糊）を作るための続飯籠のことで、飯粒をつぶすことから「穀つぶし」というしやれで相手をののしる言葉になつたと言われており、このことは古典落語のマクラにもよく語られる。しかし、「へら」という音をわざわざ「べら」と濁らせることにはかなり違和感があるので、よくできたしゃれではあっても納得しがたい。

一方の「便乱坊」については、江戸時代に異形の者を「べらぼう」と名付けて見せ物にしたことからきており、当時その形状と奇行がかなり話題になつていたようであるから、普通の人間ではないというほどの意味で「べらぼう」を用いることには違和感がない。

となると、『日本国語大辞典』の説、「大工調べ」の説、いずれをとっても「あたぼう」の「ぼう」は「棒」ではなく「坊」の字があてられることになり、語源的には人をさすものだと考えてよい。ただし、けん坊の坊と同様の扱いをすることには無理があるので、「大工調べ」の説をとつておくのが穩当かと思う。「人を親しみまたは嘲つていう『坊』の意か」という『日本国語大辞典』の不確かな説明も、淵源をたどればそうなる、というほどの意味だったのかもしれない。

「のこで一升」にせよ、「あたぼう」にせよ、いかにも江戸っ子らしい省略語だという気がする。

## 二

俗言の派生というと、音をひっくりかえす方法も昔から使われている。

要するに東京のかつぎや……に当たる、げんを気にする人をいいます。この「げん」という言葉も「ぎえん」——縁起をさかさまにした洒落ことばです。（ちくま文庫『桂米朝コレクションI』）

現在も「業界用語」などと称してやたらに音を逆にする風はあるし、それ笑いの種にする芸人もいる。が、やはりこれも昔から言葉遊びのひとつとして

樂しまれてきたことなのである。げんが悪いという表現に至つては、落語にかぎらず日常生活にも浸透しているほど、それゆえ語源を探ろうという気さえしないほど普及したものなのひとつであろう。

「オーヤ、オヤ。驚き、桃の木、三隣亡。お天道様と一緒に懷中もクヤツちやつたい。どうするどうする年の暮れ……。じやねえ秋の暮れ、と来やがつたネ。城下町だい、旅籠はいくらもある。軒イ並べてあるが誰アれも俺を誘わねえ。服装で懷中を読みやアがる。流石アプロだネ。千里眼だ。こちどらの無一文ア見通してケツカル……」

「九州吹き戻し」『立川談志遺言大全集3』

古典落語の出だしにはよくある場面である。道中で旅銀は尽きていたが、でなければ野宿は避けたい。ほんのわずかでもきつかけさえあればどこかの旅籠にもりり込んでやろうという主人公の登場だ。「クヤツちやつた」は文脈からして「空っぽになつた」の意味だと推測できるが、これなどはとても一般的とは言えない言葉であろう。

（「やく（厄）」を逆にした語）盜人・てきや仲間などの隠語。①物事のうまくいかないこと、散々なこと、役に立たないこと。また、そのまま。物事が悪いこと全般にいう。

『日本国語大辞典』の説明には右のようにあり、いわゆる業界語の一種であることがわかる。

「クヤツ」とともにわかりにくいのは「無一文」のルビであろう。しかも、「きたやま」の語を直接調べると無一文という意味はどこにも見あたらないのである。

彼も猛烈な喰いしんぼうであるが、人の顔を見て、いきなり、何を喰いましょうか、なんてことはいわない。  
やあ、やあ、といって、それぢやア乗りましようか、とさりげなくホームに行く。

腹は北山だが、私もガツガツするのはよそと思う。

『喰いたい放題』色川武大

「きたやま」が無一文につながるためには、どうしてもここを経由しなければならない。腹が減つてることを「北山」と言うのである。これも『日本国語大辞典』にのっているが、「来た」の意を「北」にかけていうしやれ、という項の中に「腹が北山」を引いている。また、小学館『古語大辞典』には次のような解説を載せる。

「きたやま【來た山・北山】『來た』に「山」を続けてしゃれた語。「きた山時雨」「きた山桜」など』江戸語。①（「腹がきたやま」という形で）腹が減つてきたの意。②氣がある、恋慕しているの意。

これに対して落語の中では語源が次のように説明されている。

喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜
清	清	清	清	清	清	清	喜
「しかし清やん腹が減つたな」	「さあもうばちばち腹かな」	「もう腹やろ」	「うん、お天道さんちよつとにじつてるような具合やな。しかしあんまり大きな声で腹が減つた腹が減つたてなこと言いなや」	「なんでえな」	「大阪者がみつともないがな」	「大阪者は腹減らんかえ」	「そら大阪者でもどこのもんでも腹は減るけれども、大きな声で腹が減つた腹が減つたてな、お前……お百姓に聞かれても面白ないがな」
							「そやけど腹が減つてんのは腹が減つた言わなしあない」
							「さあさあそこを粹言葉しやれ言葉で言えんかちゅうねん」
							「粹言葉しやれ言葉いうたら」
							「つまりやな、らはが北山底でも入れよか、てなこと言うたら人に聞かれてもわからんやろ」
							「わしが聞いてもわからん」

清 「お前が聞いてもわからなんだらしようがないがな」

喜 「へンなんのこつちやいな、らはがきたやま」

清 「つまりな、はらをひつくり返してらはや、北山はすいて見える……は

らが減った、らはが北山、底でも入れよか、飯でも食おかとこうなるね

ん」

「伊勢参宮神之賑」（ちくま文庫『桂米朝コレクションII』）

上方落語を取り上げ出すとなじみのない言葉が多くなりすぎるので、基本的にはここで扱わないことにしているのだが、「北山」が京都のものである以上、ここは敬意を表して上方ものに登場していただく。「伊勢参宮神之賑」はあまりなじみのない嘶かと思うけれども、「七度狐」につながる嘶であって、実際に「七度狐」でも同じ場面が語られている。ここに引用した部分の続には、体の部分名称をとりあげて音を逆にする言葉遊びがあり、ごく一般にそれが広まっていることを覗わせる内容である。

さて、ここに語源はあるものの、「北山はすいて見える」ということがすでに解りにくい。

「北山」は京都北方の諸山をさす言葉で、特定の山をいう語ではない。つまり、重なり合って見えてる山々全体が北山なので、「すぐ」は「透く」であり、隙間を作つてまばらに見えてる様をいうのである。古語の「透く」は四段活用動詞だから、「透きて」が「透いて」と音便化し、「北山はすいて見える」ということになる。このように、空間を作つた状態が「すぐ」という動詞と深く関わっていることを考えると、「腹が減る」ことを「腹が空く」と表現することも、北山はすいて見えるという表現と、意味の深いところでつながりをもつことがほの見えてくる。

ここまで原義を考えた上で「無一文」に戻ろう。といつても、既に説明は不要かもしれないが、空間ができる、「透く」「空く」といふことを「透く」「空く」といふ。その連想から「北山」になるのだから、懷中が空っぽになることをも「きたやま」と言うことができる。説明しなければ解らないようなしやれ言葉を使うあたり、いかにも落語的であつて、言葉遊びの粹という思いがれる。ただし、辞書類ではこの落語的解釈を採用しない。あくまで「来た」の意のしゃれだという立場をとつてゐるわけだが、これでは消化不良の印象をぬぐえ

ないのでないか。

三

あらためて『日本国語大辞典』の「北山」を見ると、

□ 気があること。 □ 衣服などがいたみ弱ること。 □ 腹が減ること。 空腹であること。

となつており、また、「北山時雨」の項にも、②の意味として、  
「北」に「来た」をかけていうしやれ。 □ こちらの思惑どおりになつてしまふからである。そうして、「北山」の□、「北山時雨」の□、「氣があること」の意味は通じにくく。

一方の落語的解釈はどうかというと、「すいて見える」の「すいて」を「好いて」とするだけで通じてしまうではないか。また、「北山」の□、「衣服などがいたみ弱ること」の意味としても、布地が弱つて透けて見えるほどになつたり、あちこち穴が空いたりすることを考えれば、本来の「透く」の意とする実に単純にイメージがつながる。

もつとも、落語的解釈では「北山時雨」の□、「こちらの思惑どおりになつていくこと」という意味にはつながりにくく。しかし、全体を眺めたときどちらの解釈がふさわしいかとすると、落語に軍配が上がるようと思えてならない。い。

落語に語られるながらには、「しゃれ」るあまりに無理矢理こじつけるようなものも確かに多い。その上、言葉の意味は時代を経て変わっていくものだから、使われ方も変わつていくのが普通である。もともとの語義が失われてい

くこともあるう。

しかし、ここで見てきたように落語に優勢判定をしたい場合もあり、また、後の時代のこじつけだったとしても、それがこれほど見事に言葉をつなげていくものならば、やはり素晴らしいものだと言わねばならない。辞書の解釈を否定するまでには至らなくても、落語的解釈のセンスの良さは伝わるのではないかと思う。